

心理社会的および心理歴史的方法の展開

——エリック・エリクソンの理論を中心として——

草 津 攻

パーソナリティと社会構造の関係、個人の発達と社会の歴史の変動の関係はいかなるものか、そして歴史の「転機」はいかなるメカニズムを有しているのか。社会心理学のみならず政治学や歴史学の分野においても、近年特に強い関心がここに向けられている。

これらの問題を扱うのが表題に示された研究方法であるが、その最も洗練されたものをエリクソンのアイデンティティ理論に見出すことができる。主張しても別に異論はないだろう。本論文はエリクソンとその影響を受けた代表的研究者を追い、表題の方法が有する可能性を明らかにしようとするものである。

序 「アイデンティティの亡霊」の時代

時代精神を刻印されたマージナル・マンとしての生活史が、エリクソンにアイデンティティ（存在証明）理論化への係わりを運命づけた。一九〇二年にフランクフルトでユダヤ系デンマーク人の家庭に生まれた彼は、家庭、学校、教会等その生活の主要な舞台において確固たる居場所を決定できない「継子」としての自己を見出さざるをえなかった。一九二〇年代のドイツを支配した文化的、社会心理学的相対主義のもとに、遍歴者としての彼の青年時代があった。人生のモラトリアム（心理社会的猶予）期間を享受し魂の遍歴を続ける青年達の背後には、

ファシズムが忍び寄っていた。青年のナルシズムは確固とした思想と、それを求めて努力するための活力を見出せない場合には、自己破壊へと向かっていくだろう。そして相争うイデオロギーがもう一つの戦争、もう一つの革命、もう一つのニューディールを歌いあげる時、青年達の「変化に対する信念は、次第に変化そのものに対して多くみられる恐怖、さらには信念そのものに対する懷疑に道を譲るようになった⁽²⁾」。能力を有しながらも社会的、文化的に「行き場」のない青年にとって、残されたものはただ「芸術家」としての道だけである。そして当時、精神分析学はどこにも所属できないこのような青年を引きつける一つの芸術として存在していた。継子エリクソンは、医学界の継子フロイトに自己同一化したのである。

一九三三年にナチスによる迫害を逃れて渡米した彼は、移民の体験をも加えたマジナル・マンとして豊富な臨床体験に基づきつつ、アメリカ産業社会の進展に沿って社会的、文化的パースペクティヴを備えつつ理論を造りあげていく。そして今日、エリクソンというパーソナリティの中で発酵させられ展開されてきたアイデンティテ

イ理論は、一世代を経て、社会的、文化的危機のもとにおかれた先進産業社会の青年達の強い共感を呼び、「アイデンティティの亡霊」の時代を現出せしめた。ニスベットは言う。先行する世代のラディカリズムと異なって、エリクソンの理論に代表される今日の社会心理学的ラディカリズムは、マクロな社会制度と具体的現実の孕む諸矛盾を行為者の内省的意識の状態に解消するものであり、したがって「人間の生活における偉大な企ての全てが、アイデンティティの危機を示すものでしかない」とされてしまう⁽³⁾と。

だがニスベットは、次の重要な事実を等閑に付している。すなわち、エリクソンに共鳴した六〇年代アメリカの青年達が、ミルズに⁽⁴⁾みられるようなエリートと大衆の分離、大衆の無力性を反映した五〇年代の大衆社会論から自らを切り離し、「離反」を通じた青年の異議申し立てという幅広い社会運動を現出せしめたこと。彼らが「運動なき理論」の五〇年代⁽⁵⁾を越えて、「一体化と反抗」を総合したアイデンティティ探究の行為の中で、コミュニティの良心と自我理想を重ね合わすことによって「組織と人間」とのアイデンティティを獲得したこと。つま

り、実存主義的側面と社会秩序の変革の側面との間に不
断の緊張を内蔵した組織としての様々の青年運動を支え、
「組織のための人間」ではなく「人間のための組織」と
いう理念のもとに「組織のなかの人間」ではなく「人間
のなかの組織」という現代の人間復権運動を展開したこ
と。⁽⁶⁾ さらに七〇年代にあっては、アイデンティティの宣
言とその社会的位置づけの合流をめざす対抗文化の運動
が、「人間潜在能力開発運動」にみられるごとく、その
理念を保持しながら社会との適切な係りをもつというし
たたかさを示し、運動の新たな段階に到達していること。⁽⁷⁾
そして、アイデンティティの探究が、マイクロでパーソナ
ルな状況だけでなく、今や国民国家の統合と分裂という
国際関係の舞台においても、その重要性をはっきりと認
められてきたということである。⁽⁸⁾

ニスベットが正しくとらえていない「社会心理学的ラ
ディカリズム」における基本的認識は何か。『エロスと
文明』においてマルクーゼは、社会秩序の象徴たる父権
への果てしない反逆が「抑圧されたものの回帰⁽⁹⁾」という
心理の弁証法によって父権すなわち人間の人間による支
配の再建に至り、ついで「父権制の反革命が宗教の制度

化によって安定させられる⁽¹⁰⁾」という「文明の弁証法」を
描き出した。この理論の背後には、人類史上の社会革命
は全て裏切られた革命だとするエリクソンと共有してい
る基本認識がある。

エリクソンは、革命的でありつつも安定した世界像を
提供したダーウィン、マルクス、フロイトに代表される
一九世紀の革命的な精神が、二〇世紀にあっては現実の戦
争、革命、反逆の歴史によってその伝統的基盤を揺がさ
れてきたと考える。革命的な精神ですらそのアイデンティ
ティを喪失した現在、「アイデンティティに心を奪われ
るといふ広範な現象は単に『疎外』の一徴候としてだけ
ではなく、歴史上の革命における矯正的な動きとしても
見做しうる⁽¹¹⁾」のだ。イデオロギーに対して十全なるコミ
ットメントをもてない現代人は、単なる疎外ではなく孤
独と絶望を感じており、単なる他人指向のリーダーでは
なくして一層深い水準の心理的障害をもつ存在なのだ。⁽¹²⁾
そうだとすれば、現代の革命運動はどのような性格を
有することになるのか。エリクソンは示唆する。レーニ
ンの時代とは比較できないほど高度に技術が発達し人類
絶滅の危機が迫っている今日、アイデンティティを求め

る闘争はレーニンの階級意識形成の闘争とある程度共通しつつも、その目的、担い手、闘争形態において独自の課題をもつだろう。⁽¹⁴⁾ マルクレーゼに従って革命的エロスに期待をかけることは解決になるだろうか。エリクソンは答える。「第一次大戦の終りにフロイトは、殺戮の後はエロスが治癒と調和の力を再主張するだろうという希望を表明することができた。だが今日では、エロスですら致命的に痛めつけられ、破壊への道を歩んでいるようだ。⁽¹⁵⁾ 個人と集団にとってアイデンティティが決定的重要性を帯びる所以である。

- (1) O. Kusatsu, "Personality and international politics," 『国際関係学研究』(津田塾大学) No. 3, 1977, pp. 89—95; O. Kusatsu, "Ego development and socio-cultural process in Japan," 『経済学紀要』(亜細亜大学) 3: 1, pp. 41—111; 3: 2, pp. 74—128 (1977).
- (2) E. Erikson, "On the nature of psycho-historical evidence: in search of Gandhi," *Daedalus*, Summer 1968, p. 744.
- (3) R. Nisbet, "Radicalism as therapy," *Encounter*, March 1972.
- (4) C. W. Mills, *The Power Elite*. Oxford University Press, 1956.

- (5) 高橋徹「アメリカの新左翼とは何か」『世界』一九六七年一月、一〇六頁。
- (6) 高橋徹「アメリカ新左翼における『組織と人間』」『組織のなかの人間』平凡社、一九六八年。
- (7) 高橋徹「思想の言葉」『思想』一九七七年三月。
- (8) 馬場伸也「国民国家の統合と分裂」『世界』一九七八年八月。草津攻「国際コミュニケーションの断絶」『国際開発ジャーナル』(特集、文化接触と対話)一九七七年八月。
- (9) S.フロイト「人間モーセと一神教」改訂版、フロイト著作集第八巻『宗教論』日本教文社、一九六〇年、二一四頁。
- (10) H. Marcuse, *Eros and Civilization*. N. Y.: Beacon, 1955, p. 59. 南博訳『エロスの文明』紀伊国屋書房。
- (11) E. Erikson, *Identity: Youth and Crisis*. N. Y.: Norton, 1968, p. 25.
- (12) H. Lynd, *On Shame and the Search for Identity*. N. Y.: Harcourt, Brace and World, 1958.
- (13) F. Weiss, "Self-alienation: dynamics and therapy," E. and M. Josephson, eds., *Man Alone*. N. Y.: Dell, p. 467.
- (14) E. Erikson, *Insight and Responsibility*. N. Y.: Norton, 1964, p. 243.
- (15) *ibid.* pp. 208—9.

一 アイデンティティの探究

不可解性と不可欠性がアイデンティティを特徴づけている。不可解性とは厳密なる定義の困難性であり、エリクソンがそこから言葉の真の意味を救い出そうとした「流行現象としてアイデンティティの爆発、噴出」を生ぜしめたものである。また彼は、その真の意味を種々の状況における不可欠性を指し示すことによって明らかにできると考えた。⁽¹⁾ 例えば社会運動を論じる場合、それは「心理的核心」を指し示し、その「危機」と「喪失」を通じてはつきりと不可欠性を証明できるものだ。⁽²⁾ これら二重の性格のゆえに、アイデンティティに関する最も有効な研究方法は、徒らに厳密な操作的定義を追い求めることではなく、具体的事例研究における「感受性喚起概念」としてそれを活用することだった。⁽³⁾

結論的に言えば、アイデンティティの形成は自己(ego)の側面と自我(self)の側面をもつ。「自我の総合力をその中心的な心理社会的機能の面で考察する場合には自我アイデンティティを論じえるし、個々人の自己イメージないしは役割イメージの統合を考察する場合には自

己アイデンティティを論じえる⁽⁴⁾。前者の能動的側面こそが「心理的核心」にかかわるものであり、アイデンティティという言葉でエリクソンが真に意味しようとしたものだ。そしてそれは、自己概念が統一され時間的にも連続していると個人が感じていること、しかもその感覚が社会的にも共有されることを必要としている。

この状態を達成すべく「心理的」過程と「心理社会的」過程は接合される。性的攻撃性は「文化の社会的様式(モダリティ)」に変容され、漸成発達⁽⁵⁾の各段階は逐次つみ上げられて「ライフサイクル」を構成する。個人のライフサイクルは社会制度と対位的に連関し、その相互作用の中から各段階の固有な課題と危機が生み出される。社会はそれぞれ独自の制度を形成することによって、成員の発達の位相に対処しようとする。また自我は、発達の各段階の危機のもとに社会過程と生理過程を媒介し、次の段階へと進んでいかねばならない。したがってアイデンティティとは永遠の分裂傾向を秘めた統合概念⁽⁶⁾なのだ。そしてその運命を追うのが、心理社会的方法で

に他ならない。社会制度とライフサイクルの対位的連関によって、

二つの歴史すなわち社会の歴史と個人の生活史が絡み合う。「新しい歴史学」(「心理歴史学」)が提唱される。古い歴史学は、全ての人間が社会的、歴史的存在として形成されていく発達過程についての分析を避けてきたし、ある状況にあつて心理学が歴史法則に従い歴史学が心理法則に従うことを理解していない。新しい歴史学は、アイデンティティとイデオロギーの相補性を分析しえるものだ。

この相補性を生み出し、またその相補性によって解明されるのが「青年期」である。この段階にあつては、制度的イデオロギーの注入と自我によるアイデンティティの探究は、同一過程の二側面にすぎない。個人生活史は歴史に新しい生命を吹き込み、歴史は個人の存在証明を行なう。青年のアイデンティティ探究行為こそがライフ・ヒストリーをヒストリーに結びつけ、個人を真に主体的、歴史的、社会的存在として形成するものだ。物象化された精神分析学の幼児期決定論と歴史学の必然性論は、このダイナミズムを解明できるものではない。

社会運動の指導者(カリスマ)と彼に率いられた大衆が織りなす壮大なドラマは、アイデンティティとイデオ

ロギーの相補性を見事に表現している。「試行錯誤とほとんど破綻をきたすほどの限界状況下の体験を通じて指導者が民衆を発見すると同時に、民衆も指導者を見出し彼らに向かつて進んでいく」(6)。すなわち「歴史が指導者を待っていたとすれば、指導者は歴史を待っていた」(7)。エリックソンが描く青年ルターと中年のガンジーは、いずれも歴史の巨大な転換期に極めて創造的な方法で自らの罪の意識を克服し解釈し直し、それによってアイデンティティの危機を克服した。こうして彼らが自己に施した救済は、彼らを追う大衆が抱える同様の問題に解決の方法を示した。集合的行為によって、指導者と大衆のパーソナリティは社会過程に浸透し、その結果、指導者は「歴史的パーソナリティとしての自己の最終的アイデンティティを受けとらねばならない」(8)。

創造され演じられる多様なドラマが、人間的生存の条件としてのアイデンティティを浮かびあがらせる。まさに「人間が生存する社会というジャングルの中では、自我アイデンティティの感覚なくしては、人は生きていくという感覚をもつことができない」(9)。個人は、ある特定の社会の特定の場所に置かれた特定の人間であること

(47) 心理社会的および心理歴史的方法の展開

を自分自身イメージし、かつは社会的に認知されることを通してのみ、社会的存在地点つまり「心理的生活空間」を得ることができる。自己の居場所と自己イメージなしには、社会的存在者としての行為はそもそも不可能だろう。アイデンティティは「人間の生存のための第一前提」であり、客観的現実を主観的に意味あるものとするための生得的「精神装置」なのだ。そして「人間は、自己の生存の可能性を現実のものとするためには、ある歴史の中の地理的に位置づけられたある社会において一個の限定された人間として発達していくという決して取り消すことのできない事実を、ともかく自らの内で統合せねばならない」⁽¹⁶⁾のだ。たとえこの統合の試みが必ず新たな危機を伴うとしても。

- (1) *Identity: Youth and Crisis*, p. 9.
- (2) O. Kusatsu, "Opposing conceptualizations of identity by Erik H. Erikson and Manfred H. Kuhn," 『経済学紀要』(亜細亜大学) 2:1 (1976).
- (3) 草津攻「アイデンティティの社会学」『思想』一九七八年十一月。草津攻「アイデンティティと社会」『現代社会学』七号(一九七七年)。
- (4) *Identity: Youth and Crisis*, p. 211.

(5) 草津攻「アイデンティティの彼方」K・ケニストン(高田他訳)『青年の異議申し立て』東京創元社、一九七七年。

(6) *Insight and Responsibility*, p. 203.

(7) R. Coles, *Erik H. Erikson: The Growth of His Work*, Atlantic Monthly Press, 1970, p. 249.

(8) E. Erikson, *Young Man Luther*, N. Y.: Norton, 1958, p. 139.

(9) E. Erikson, *Childhood and Society*, Penguin 1965, p. 232.

(10) E. Erikson, *Gandhi's Truth*, N. Y.: Norton, 1969, pp. 296—7.

二 アイデンティティの彼方⁽¹⁾

心理社会的アイデンティティは、今ここに存在するはかなき人間のために投錨地を提供する。アイデンティティの確立なき他者との融合は、自己喪失を結果させるだけだ。また「人間の実存の限界を十分に理解するためには、ある具体的な時間的かつ空間的地点において『ゲームの規則』を十分に体得しておかねばなるまい。哲学的『異邦人』として生きることは成熟した人間の一つの選択だ。だがそれを選択できるためには、未だ成熟してい

ない人間は成熟した人間の助力のもとに、まず仕事と愛のアクチュアリティの中に自らの住み家を見出さねばならない⁽²⁾。人は誰もその人生の果実を奪われるべきではない。行方不明になるためには先ず自己を発見しておかねばならないし、ドロップアウトするためには先ずどこかに所屬しておかねばならない。アイデンティティを失うためには先ずそれを発見しておかねばならず、アイデンティティを超越するためには、それを「回避するのではなく通り抜ける」ことが必要だ⁽³⁾。

探究に必ず伴う「危機」は、しかしながらアイデンティティの彼方への旅立ちを準備するものだ。なぜならば、一つには「ある特定の種になることは個人的かつは集団的アイデンティティを求める人間の重要な一要素ではあるが、個人的・集団的アイデンティティは全てある意味で偽りの種とならざるをえない⁽⁴⁾」からであり、二つには、ライフサイクルにおける青年期の終了はアイデンティティの彼方の段階に至るからだ。つまり、人間の核心には「心理社会的アイデンティティを超越することができ、それを越えて生き残らねばならない⁽⁵⁾」^(私)、認識と意志との洞察的中心である^(私)が存在し⁽⁶⁾、し

かも例外を除いてはどのような人間も青年期には自己超越を果すことができず、ライフサイクルのその後の段階に何らかの形でアイデンティティの危機が復帰し、アイデンティティの問題は生涯を通じて幾度も再現せざるをえないからである。

『青年ルター』がアイデンティティとイデオロギーの書ならば、『ガンジーの真理』はアイデンティティの彼方の書だ。^(私)はルターにみられるごとく、神経症と実存的葛藤がぶつかり合う境界領域において何ものにも遮ぎられることのない認識を求めて格闘し、青年期の経験の中ではじめて己の独立を意識する。ついで「あまりにも限定されすぎた自我を超越し、遅かれ早かれガンジーの真理が明示しようとした存在対政治のディレンマに直面する⁽⁶⁾」。

今日、すべての「適応」をうまく行ない統合された文化の中でアイデンティティを発見したという人間にとって、一体何が残されていると言うのか。家族や職場の「小さなほら穴」に専ら注意を向けることが、果して「成長」を意味するのか⁽⁷⁾。それはまさに自己疎外としてのアイデンティティ探究ではないだろうか⁽⁸⁾。経済と文化

の「葛藤と条件」が「偽りの種」としての片輪の「専門家」をつくり出しているのではなからうか。エリクソンはかくして、「神経症的退行」という範疇では説明できない、人類の新しい適応にとってはむしろ危機的な歴史のかつ共同的固着（集団的退化）を指摘し、既存のアイデンティティの病理性を暴露する⁽⁹⁾。

実際、人間の発達は決してアイデンティティとともに始まり終わりを上げるといふものではなく、アイデンティティは真の成熟にとって相対的意味しか有していない。だがそれが絶対的なものとして偽りの自己主張をするときは、「アイデンティティ抵抗」が形成されるのだ。そして真の個性の探究と究極的な問題に向かっての人間の解放の営為が開始されるのは、この「抵抗」つまり「神経症的憤慨」が終りを告げ、単なる「再適応」が超越される地点からだけである⁽¹²⁾。

- (1) 『幼年期と社会』第二版（一九六五）の第四部は「不安の彼方」の標題をもつ。エリクソンが「アイデンティティの彼方」に言及するのは一九六八年の「アイデンティティ—青年と危機」が最初のものである。
- (2) *Insight and Responsibility*, p. 99.
- (3) *Identity: Youth and Crisis*, pp. 42, 100.

(4) *ibid.* pp. 240—1.

(5) *ibid.* p. 135.

(9) E. Erikson, "Autobiographic notes on the identity crisis," p. 757.

(7) *Insight and Responsibility*, p. 105.

(8) E. Schachtel, "On alienated concepts of identity," in E. & M. Josephson, eds., *op. cit.* p. 83.

(6) *Gandhi's Truth*, p. 252.

(10) "Autobiographic notes on the identity crisis," p. 758.

K. バークは次のように述べている。「ブルジョアの自然主義は、そのありのままの表現において「個人」と「環境」とのあらゆる区別を行ない、そこから当然のこととして、個人の「アイデンティティ」は私的で彼自身に特有のものだという考えにたどりついてしまう。……だが、ブルジョアの心理学者が人間は自分を越えた全ての種類の表現に「自己同一化する」ことを発見したとき、彼らはこの傾向から自ら救い出せようと試み始める」。K. Burke, *Attitudes Toward History*, Vol. II, pp. 138—9.

(11) *Identity: Youth and Crisis*, p. 214.

(12) *ibid.* p. 293.

三 歴史のアクチュアリティ

アイデンティティと現実が接触不良を起こせば「痛ま

しいほどの自意識」つまり「アイデンティティ意識」が生じる。入手可能な役割の中から現実感を得ようとする
ことよりも、「最も忌むべき、最も危険な、だが同時に最も現実的なる」ネガティブ・アイデンティティを倒錯的に選択することの方がた易くなり、自我の現実への適応能力は低下し、世界はよそよそしく敵対的な姿を現わす。歴史の運命と生活史が共謀することによって、自律性を求める自我の能力は枯渇させられてしまう。⁽²⁾ かかるアイデンティティ意識は生活史と歴史との十分な相互補完関係、つまりアクチュアリティによってのみ克服されるだろう。「力を回復した、あるいは一層よく訓練された歴史的アクチュアリティの感覚のみが、潜在する発達の可能性を活性化し、かつはそれによって活性化される諸エネルギーの展開をもたらさしめるのだ」。⁽³⁾

真の適応とはどのようなものか。社会的存在であるということとは、人間が所属する時代と社会の中でのみ生きることを決して意味してはいない。彼のアイデンティティは「時には時代のイデオロギーに相伴い、時にはそれに闘いを挑まざるをえない」⁽⁴⁾ だろう。その闘いにおいて、革命的な意識はただ単に統合を保っただけの己の生活を

犠牲に供し、状況への単なる順応を拒否し、人類の「心理社会的進化」を持続させるべく「完全性」wholenessの回復をめざしていくだろう。そして創造的反抗者は、自己蘇生の出発点としてネガティブ・アイデンティティを選択せざるをえないだろう。反抗者の誠実なる憤りは、人間の内面と外的世界を単に妥協させるのではなく、一層現実的に調和させるのだ。

創造的反抗において症例はのり越えられ、歴史的現実との触れ合いによって内的再統合が達成される。行為の中で獲得されたアイデンティティの肯定的感覚がアイデンティティの否定的意識を克服する。例えば黒人の解放運動にあって青年達は「激烈な闘争の最中でまさに自己喪失を決意することによって自己を発見し、実際彼らの同世代を発見した」⁽⁶⁾。アクチュアリティのもとに、自己昂揚と歴史的決断は同一線上に並ぶ。偉大なる歴史的決断にあっては、「情熱に満ち民衆に選ばれた、すぐれた指導力をもつ人間や集団が、自らの過去と民衆が担う典型的な過去を結合し、そこから共有できる未来を創造し、そして行為の中で真理の概念を獲得しまた提供する」のだ。⁽⁷⁾ こうしてケイス・ヒストリーとライフ・ヒストリーは

明らかに異なっており、歴史的现实は臨床の場に決して還元できないものだ。エリクソンは言う。「患者は症状が重い場合も軽い場合も内面的葛藤によって増々弱くなっていくが、歴史的アクチュアリティのもとでは、内面的葛藤はいかなる超人的努力にとっても不可欠な勢いをひたすらつけ加える」。現実的行為は意識よりも重みをもたざるをえない。したがってアイデンティティに関する真にアクチュアルな問いかけは「私は何者か」ではなく「私は何になりたいのか、そしてそのためには何をしなければならぬか」になるだろう。アクチュアルな状況においては、アイデンティティの危機は必然的な転換点つまり決定的瞬間を意味するのだ。⁽¹⁰⁾

- (1) *Identity: Youth and Crisis*, p. 176.
- (2) R. Evans, *Dialogue with Erik Erikson*, N. Y. Harper & Row, 1967, p. 57.
- (3) *Identity: Youth and Crisis*, p. 315.
- (4) *Young Man Luther*, p. 221.
- (5) *Identity: Youth and Crisis*, p. 301; *Insight and Responsibility*, p. 156.
- (6) *Identity: Youth and Crisis*, p. 300.
- (7) *Insight and Responsibility*, p. 205.

(8) *Gandhi's Truth*, p. 363.

(9) E・エリクソン(栗原訳)「自我の正体を求めて」高橋徹編『組織のなかの人間』平凡社、一九六八年、三二五頁。マルクスの次の言葉を想起されたい。「問題はプロレタリアートが何であるか、また彼の存在におうじて歴史的に何をしよう余儀なくされているか、ということである」。「神聖家族」『マルクス・エンゲルス全集2』大月書店、一九六〇年、三四頁。

(10) *Identity: Youth and Crisis*, p. 16.

四 「歴史の方程式」

従来、精神分析学は個人の治療を目的とし事例史に係わりをもつ限りでその妥当性を示してきた。だが他方、事例への関心の瑣末化は社会構造が孕む問題性の明確なる認識を阻むものともなる。そしてそのような場合には、所与の社会的状況に単に適応させるのではなくそれを越えて人々の潜在的な能力を活性化させるということは不可能となってしまう。⁽¹⁾

しかしながら個人を対象とする心理学の方法をそのままマクロな社会と歴史の分析のために用いることは、もちろん正しくないだろう。個人の狂気と集団の非合理性

を単なるアナロジーによって説明することなどはしない。精神分析学はコントロールされたある条件のもとでのみその妥当性を保持できる。それは『実験的』状況、方法的傾向、個人的かつイデオロギー的関与の極めて特殊な合成物⁽²⁾なのだ。個人的解決を社会的解決と見做し易い臨床家の限界は、エリクソンが描くようにルターの解決の限界である。つまり「ルターは人間の意識を新しい高みにまで導いたが、その際社会問題を引き起こすことによって個人的問題に解決を与え、世界を家族関係の投射されたものとして取り扱い、そのことによってある程度まで問題を解決してしま⁽³⁾った」。

実際のところ歴史状況はしばしば自我に敵対し、無意識の古めかしいメカニズムを呼び起こし、肉体の活力や自我の力を喪失するよう人々に強要することによ⁽⁴⁾って、その客観的自立性をあからさまにして⁽⁴⁾いる。かかる歴史の強制力のもとにあって個人が己の自由を保持できるのは、自我アイデンティティに一体化することを選択しえる時、そしてなされるべき何物かのために所与の条件を活用することを学んだ時だけである。このようにしてのみ「個人は己の唯一無二のライフサイクルと人類史のあ

る特定の部分の必然的合致のもとに自我の力を引き出すことができる⁽⁵⁾」のだ。イドや超自我と比べてアイデンティティは、歴史との間に一層緊密な関係を有している。したがって「アイデンティティ抵抗」のようなものに対処するためには、単なる個人レベルの分析だけでなく、歴史のイデオロギーをも対象とした「応用精神分析学」と呼ぶべきものが必要とされるだろう。

イデオロギーは、歴史における客観的現実として存在する。心理歴史的方法は、自我を取り巻く世界が「イデオロギー構造」を有していること、そしてそれに対処しつつ変化をとげていくことがアイデンティティの「務め」であることを示した。アイデンティティの理論が必ずイデオロギーの考察を含む⁽⁶⁾ということは、かくして「避けることのできな⁽⁶⁾い歴史の方程式」なのだ。

(1) *Identity: Youth and Crisis*. pp. 68-70.

(2) "Autobiographic notes on the identity crisis." p. 759.

(3) *Young Man Luther*. p. 250.

(4) *Identity: Youth and Crisis*. p. 74.

(5) *ibid.* p. 74.

(6) *ibid.* pp. 27, 40.

五 統合概念解体の契機

エリクソンにとって統合とは両極端を混合して均衡した全体をつくることであり、人間にとって「永久的に存在する葛藤」の風、つまり「中間的段階」In-between stage を達成することである。従来の精神分析学のように単にイドと超自我の一時的休戦状態としてこの段階を扱うことによっては、統合がもつ真の意味は解明できないだろう⁽¹⁾。統合の「最初の状態にあっては肉体的、社会的、人格的という三つのシステムは相互に調和しているように思われる。すなわち身体的経験は（単に多少とも機能しているというのではなく）生き生きとし、人格は（単に適応しているというのではなく）特有の表現をもち、社会生活は（単に多少とも組織されているというのではなく）真に共同体的なものとなる⁽²⁾。したがって「治療」は、「自我総合と社会の組織化の相互補充作用」を説明する総合概念を必要とするのだ⁽³⁾。

身体と人格と社会との間に存在する永遠の葛藤が人間の運命をつくり上げていること、そして治療や社会革命というユートピア的統合をめざす行為が目的を達成する

のは容易ではないということをエリクソンは忘却してはいない。彼は言う。アイデンティティの二項図式における「分極化とは、持続する緊張とダイナミックな相互作用である。……ダイナミックな相互作用は明確な両極を必要とする⁽⁴⁾」。しかしながら、エリクソンのこの叙述と「中間的段階」に関する叙述は相矛盾しないだろうか。たとえば、現存する社会制度は個人の発達の「正常な」過程と照応するのは稀であり、その多くは個人の「異常な」発達によってその安定を維持している。相矛盾した制度と価値が造り上げる現実の社会では、個人の「心の傷」の多くは開いたままにされている。統合は果して可能だろうか。

実際、エリクソンの理論はこの点においていくつかの批判を向けられてきた。例えば女性解放論者K・ミレットは『性の政治学』において、エリクソンの「女性の内的空間」に関する議論は女性が社会的に学習させられた行動をあたかも生物学的特性に基づくものにとらえていると批判する。それに対してエリクソンは自分の論議は決して厳密な「実験」に基づき「証明」をめざしたものであるのではなく一つの「傾向」を示したにすぎないと反論する

が、彼の示唆する身体と社会の図式 (zone-mode-modal-
 性) が未だ科学的検証を経たものとは言えないこと
 は確かだろう。さらに、エリクソンがそこに行爲のアク
 チュリテイを見出した「反抗者」自身にしてみれば、そ
 の行爲は媒介を通じても決して「完全性」wholeness を
 達成できない「ネグリチユード」つまり統合不可能な両
 極性を身をもって示しているのではなからうか。(6) かくし
 てクーバースミスは言う。「エリクソンのネガティヴ・
 アイデンティティに関する論議は、彼のもちまへの洞察
 を示してはいない。それらは、不正な差別を受けている
 と考える当の人々のパーソナリティを構成している怒り、
 陰気、絶望といった感覚を正しく伝えてはいない」。(7)

「現実的な極どうしは、まさに現実的な極どうしであ
 ればこそ、相互に仲介されることはできない」し、現実
 の矛盾の解決は「それらの矛盾の運動を可能にするよう
 な形態をつくり出す」ことよってのみ行なわれるとい
 うマルクスの弁証法の論理に依拠するならば、「もしも
 そのいくつかの前提の論理を一層ラディカルに展開して
 いたならば到達したと思われる地点にまでは、エリクソ
 ンは到達できなかった」というフロムの批判が導き出さ

れるだろう。また、社会と個人の矛盾を未解決に放置し、
 事態そのものが内に孕む相剋を明らかにし、あえて体系
 的調和を求めないことにフロイトの分析の革命性を見出
 しつつ、アドルノは自我心理学に対して厳しい批判を向
 ける——「社会を研究する者が知り得る全体性 (totality)
 はただ敵対的な全体 (whole) であり、たとえともかく
 全体性を達成できるにしても、ひたすら矛盾の中でしか
 も矛盾を通してのみである」。(11)

エリクソンの言う社会とは、自然からの疎外という
 「根なし」体験に基づく偽りの種への分裂によって特徴
 づけられた生態系のサブシステムであり、「世代の物質
 代謝」の過程である。だがここでは社会的物質代謝の過
 程は論の中心に据えられてはいない。「マルクスとフロ
 イトという異なった収斂と分岐でもって始まった経済学
 と心理学の理論」を比較・考察する必要性は指摘されな
 がらも、その十分な展開はなされなかった。労働におけ
 る「技術」の内在的意味解明はなされず、人間は歴史の
 中で抽象的に技術に向かい合う。(13) 社会の歴史はライフ・
 ヒストリーと絡み合う限りにおいてのみ考察の対象とな
 る。二項の一方の極(社会)は他方の極(身体)に「き

「つばりと」⁽¹⁴⁾ 対峙させられず、社会はその独自の論理を明らかにされぬままに他の極に引き寄せられていく⁽¹⁵⁾。

だが我々は、アイデンティティを感受性喚起概念として活用することによってエリクソン自身が統合概念解体の準備を行なっていることに注意すべきだろう。社会的現実がエリクソンにアイデンティティの概念化を要請した——つまり「臨床的努力と発達の努力、社会的努力と歴史的努力が互いに近づいてくるにつれてある新しい用語が必要とされている」⁽¹⁶⁾ のだ。そして概念それ自体が現実に即しつつ超克されていく必然性をもつ。「ある概念は、それなくしては理解不可能で相互に一見無関係な現象の中に手掛かりとしての秩序をもたらすものとして意味をもつにすぎない。しかもこの秩序は、危機すなわち無政府状態のうちに潜む復興のための諸力を顕示してくれるのだ」⁽¹⁷⁾。かかるアイデンティティの概念化は、急激な歴史変動の光に照らして己の思索を再評価することを研究者に求めるだろう⁽¹⁸⁾。人間存在の核心的部分を問題にする時、個人的、概念的、かつ歴史的理由によって概念は暫定的なものにならざるをえない。とくに概念や解釈が「それ自身を歴史的に意識した世界の一部となる時」

つまり「時代精神」となる時や、「洞察や行為が新しい『伝統』を形成する余裕をほとんど残さないほど直接相互に影響しうる時」には、全ての思索は「生存における一つの実験」と化してしまふ。エリクソンは、アイデンティティ論を一つのシステムとして考えてはいない。それはあくまで暫定的で、歴史的妥当性と影響力によって「限定されあるいは高められる一片の生きた概念」として提示されたものなのだ⁽¹⁹⁾。

- (1) *Identity: Youth and Crisis*, p. 52.
- (2) E. Erikson, *News Week*, Dec 21, 1970, p. 47.
- (3) *Identity: Youth and Crisis*, p. 53.
- (4) *ibid.*, p. 38.
- (5) *News Week*, op. cit. p. 49.
- (6) F. ファノン (海老坂他訳) 『黒い皮膚・白い仮面』みすず書房、一九七〇年、九二頁。
- (7) S. Coopersmith, "Book Review—Identity: Youth and Crisis", *Psychiatry*, 1969, No. 4, p. 468.
- (8) マルクス「レーゲル国法論批判」『マルクス・エンゲルス全集(1)』大月書店、三二九頁。
- (9) マルクス『資本論』(普及版) 大月書店、一九六八年、一三八頁。
- (10) E. Fromm, *The Crisis of Psychoanalysis*. Fawcett

Premier Book. 1970. p. 32.

(11) T. Adorno, "Sociology and psychology," *New Left Review*, No. 45, Nov.-Dec. 1967. p. 74.

(12) *Childhood and Society*. p. 259.

(13) 例えば「変動期における『技術主義的青年』と「普遍的な青年」への分極化と」とらえ方。 *Insight and Responsibility*. p. 151.

(14) マルクス「ヘーゲル国法論批判」前掲書、三三〇頁。

(15) フロイトの仮説構築の方法は「独自の対象の独自の論理をつかむ」(マルクス)というものではない。例えば、「これらの仮説はできるだけ他の分野から取ってきて、それを心理学に転用することが望ましいようである」という言葉。フロイト「本能とその運命」『フロイト著作集(6)』人文書院、六五頁。

(16) E・エリクソン「自我の正体を求めて」前掲書、三二〇頁。

(17) *Identity: Youth and Crisis*, p. 320.

(18) *ibid.* pp. 11-12.

(19) *ibid.* p. 43. フーバーも「個人と社会について全てを説明できるか否かにはなく、それらが関連し合う決定的様相を説明しえるか否かに、エリクソンの理論の試金石を求めよ」と。 K. Hoover, *A Politics of Identity: Liberation and the Natural Community*. Urbana: Univ. of Illinois Press. 1975.

六 統合概念の発展的解体

エリクソンの影響を受けた研究者は、社会と歴史に関してどのような理論化の作業を試みただろうか。ケニストンは『状況に関らぬ者たち』において、従来の方法では十分に説明できない現代アメリカの青年にみられる新しい疎外現象、すなわち「疎外を直接に引き起こす主体が自己である疎外」、しかも単に対象との関係を喪失しているだけでなく「疎外の対象を積極的に拒否することを含んだ疎外」に関する分析を試みた。「離反」(新しい疎外)は純粋に個人的な問題として、あるいは社会的問題としてそれを扱うという従来の方法によっては説明できないだろう。「個人と社会が相互に幾重にも絡まり合った網の目」と「それらがいかにして、また何故関係し合っているのか」が明らかにされねばなるまい。ケニストンはそのために同書を「疎外された青年」と「疎外する社会」という二つの横成部分に分け、そしてそれらの関連を描き出そうとする。しかも「疎外する社会」の部分では新しい独自の社会学的分析が施されている。エリクソンの「発達における徳性」virtueはそれぞれの社会

で優先順位を異にする「社会的徳性」としてとらえ直され、また「心理歴史的な伝達には『歯車の一種のかみはずれ』が存在している」こと、例えば離反の社会学的分析と心理学的分析は完全には重なり合わないことが強調される。

彼の『ヤング・ラディカルズ』⁽³⁾は六〇年代の青年達が運動においてカリスマ的モデルを発見しラディカルな関与に到達する過程を分析したものであるが、同書ではこの青年達を特徴づける、現代世界の物質的豊かさによって可能とされた「青春期と成人期との間に入り込んで新たに形成された段階」の独自性が明らかにされる。すなわち彼らは単なるアイデンティティの危機とかエリクソンの言う「引き延ばされた心理社会的猶予期間」によって特徴づけられるのではなく、心理学的にはアイデンティティを越えた「成人期」に、また社会学的には完全なコミットメント以前の「実験」の段階に在るのだ。このようにケニストンは新しい「青年期」Youth概念を提出することによって、エリクソンの「アイデンティティの彼方」の思想を一層具体化しようとした。

またリフトン、歴史上の偉大な人物に焦点をあてる

エリクソンの心理歴史学がその特異な才能のゆえに単純化され他の研究者にとって活用困難なものとなっていることを指摘し、特定の一個人ではなく歴史的に重要な共通のテーマやイメージに焦点をあて、「歴史主義」と「心理主義」の両極に対して距離を保った「新しい歴史的心理学と心理的歴史学」を開拓しようとする。現代世界を特徴づけるのは、(1)「歴史的ないし歴史心理学的断層」(ライフ・サイクルにまつわる種々の象徴と自己が結びついているという感覚の崩壊)、(2)「イメージの犯濫」(マス・メディアの洪水の中で個人としての境界が崩壊すること)、(3)「自己と自己の象徴に迫る脅威」(核兵器の衝撃による人類の破壊の境界の消滅)であり、それらは境界の流動性と歴史の決定的重要性を浮かび上がらせ、アイデンティティではなく彼の言う「自己・過程」を、また変貌自在な「プロテウスの人間」を舞台に登場せしめる。⁽⁵⁾

プロテウスの人間のスタイルは「終りのない実験と探究の連続」によって特徴づけられ、イデオロギーに対する絶対的忠誠ではなく、たとえ断片的なものであれ自己にとって真正なるものが絶えず求められる。歴史的絶滅

のイメージと単一の種としての人類というイメージは「新しい歴史」をつくり出す。すなわち「人間の——生物学的、経験的、制度的、科学技術的、審美的、解釈的——文化形態の徹底的な再創造であり、多くの人々の参加によって行なわれる……境界の延長であり、その再設定でもある」歴史だ。ここでは革命もその姿を変える。

重苦しいイデオロギーの全体主義は拒否され、青年達は息のつまりそうな「個人的境界」の設定に抵抗し自己のスタイルを表現しようとする。リフトンはこれを再生のイメージを追求していく「形式の革命」もしくは「過程の革命」と呼ぶ。

みられるごとくケニストンとリフトンは、エリクソンの思想の延長線上において統合概念の発展的解体を試みている。この地点から振り返ってみると「究極的にはエリクソンが代表している発展だと考えられる全てのものについては、我々は現在その始まりの段階を目撃しているにすぎない」と言っただろう。一層包括的なアイデンティティを求めていく人間の営みの過程で、既製のそれは歴史的に解体・超克されるといふ運命を免れないのだ。

(1) K. Keniston, *The Uncommitted*. N. Y.: Delta, 1965.

(2) *ibid.* p. 432.

(3) K. Keniston, *Young Radicals*. N. Y.: Harcourt Brace Jovanovich, 1968. p. 263. (庄司他訳『ヤングラディカルズ』みすず社、一九七三年)。

(4) R. Lifton, *History and Human Survival*. N. Y.: Random, 1970.

(5) R・リフトン(外林訳)『誰が生き残るか—プロテウス的人間』誠信書房、一九七一年、三二二、五五—五六頁。

(6) 同書一二五—六頁。

(7) R. Lifton, *op. cit.* p. 296.

結 歴史をつくる方法

アイデンティティの彼方に進み行くことは、己を縛る条件よりも強靱たろうとし、もしもその条件が正しいものでなければそれを克服するために必要な道を辿り、そしてそのことを通じて己自身になることである。⁽¹⁾ ハンプデン・ターナーが描く「ラディカルな人間」は、次のように問いかけ、その行為を通じてアイデンティティの彼方に進んで行く。すなわち(1)己の敵対者をありのままの姿で認識できるか、(2)己のアイデンティティを弁証法の

危険と衝撃に晒すことができるか、(3)己の思想を論争の内に置いたまま個人主義の意味を再考し、また個人主義と共同性は相反するという見方を徹底して排除することができるか、さらに(4)弁証法が総合に道を譲るまで自己確認を遅延させておくことができるか。彼は対立した世界を和解させることによって人格の自由だけでなくその統合力を示し、倫理的かつ創造的な統合を世界に向けて投射する。それはエリクソンが切り開いた地平に現れる「新しい歴史意識⁽²⁾」の担い手の姿だ。

エリクソンはアイデンティティの構造を明らかにし、歴史における人間の主体性という古くからの問題に対して今日的解答を与えた。主体性に関する論議は、臨床の場における洞察と歴史の舞台における指導者と民衆の相互活性化のメカニズム説明によって、我々の前に新たな拡がりをもって据えられた。精神分析学の洞察は歴史的創造力に結合され「歴史をつくる方法⁽⁴⁾」を明らかにした。リンドは言う。「時間と空間における人間の直接的状況への同一化を越えた同一化……それはまた現在の社会がもつ抑圧と矛盾を暴露し、一層普遍的な価値を生み出す芽をその中に発見し、一層完全な実現をめざして能動的

に社会を変革する作業に従事することを含んでいる。一個の人間としての誇りは、長期の目的のために現在の挫折に堪えられるか否かにも依存している⁽⁵⁾」と。エリクソンはこの主体性の秘密に触れた。主体性の論議を科学の中に組み込む作業は、彼によってその重要な基礎を据えられた。

エリクソンの思想をここまで追ってきた我々は、今やリフトンとともに次のように言うことができるだろう。

「『ルター』の叙述にみられるごとく、新しい心理歴史学的統合へと導かれた人間の内的葛藤は、自我心理学の極限にまで到達している。自我心理学は実際、従来とは全く異なった何ものかに変形されている⁽⁶⁾」と。

(1) C. Hampden Turner, *The Radical Man*. N. Y. Doubleday. 1971. p. 41.

(2) 歴史意識の形成は現在極めて困難な状況に置かれている。しかも重要なことは、「対人関係的、美的、そして歴史的認識において要求される想像力に満ちた感受性の間には、それぞれ密接な関係がある。それは全て個人のアイデンティティの能力に依存しており、その拡大は、人生計画の質を破壊することなく、あるいは自分を失うことなく個人のアイデンティティを他者の人生計画に晒すことによって行

- 「追記」を参照。M. Stein and A. Vidich, "Identity and history," M. Stein & A. Vidich, eds., *Identity and Anxiety*. N. Y.: Free Press, 1960. p. 30.
- (3) D. Elkind, "Erik Erikson's eight ages of man," *New York Times Magazine*. April 1970. p. 114.
- (4) *Gandhi's Truth*. p. 439.
- (5) H. Lynd, *op. cit.* p. 255.

(6) R. Lifton, *op. cit.* p. 296.

「追記」本論文は、一九七三年に南博教授のゼミナールで作成した修士論文「アイデンティティ理論の研究」の結論部に加筆したものである。

(シカゴ大学大学院)